

タイトル	敬讓の"れる・られる"をめぐる
著者	岡野, 哲
引用	北海学園大学人文論集, 11: 1-30
発行日	1998-10-31

敬讓の“れる・られる”をめぐって*

岡野 哲

Summary

On Honorific Verbal Ending <-RERU/-RARERU>

By defining the status of <-RERU/-RARERU> in the system of the Japanese language not as an inflective particle (JODOSHI), but as a sort of ending added to some types of verbs to form a class of honorific verbs expressing the respect to the addressee and/or the event involving the addressee, we succeeded in showing that the <-RERU/-RARERU> verb group functions as an element of the DICTUM as against MODUS of the clause structure.

As this type of verb group serves formally to exalt or honor the addressee etc. in an objective way because of being an element of the DICTUM, it is natural that <-RERU/-RARERU> verb groups occur quite cogently in the talk or question in which the Emperor or some other member of the Imperial Family addresses directly to a qualified citizen personally or to a large audience in a public speech. This fact proves that the use of the <-RERU/-RARERU> verb group is not the realization of power relationship, but simply a style of speech suitable to an official occasion.

The users of this type of verb group extend from the Imperial Family to other persons holding higher official positions through to TV personalities or TV reporters, since those last categories can be accounted as representing some institutionally sanctioned organization.

The analysis of the recorded data reveals the tendency in which the position of <-RERU/-RARERU> verb group is not that of an expression of genuine respect towards the addressee etc., but that of a formal

style of politeness, restricted in its use to the institutionalized event, with occasional aberrations.

The study of the verb group in terms of genre or register remains to be resumed together with the research related to the other semantic aspects of <-RERU/-RARERU>.

Key Words: *politeness, style, genre, register, situation.*

序 言

“れる・られる”は、周知のように、助動詞として「自発・可能・受身・敬讓」の意味に使い分けられるとされている。これら四種類の意味は、互いに小さからぬ差異をもっているにもかかわらず、形態上の違いが殆ど認められないために、当然ながら曖昧さが生じる。例えば⁽¹⁾,

(1) [場面：大学教養課程の教室／授業開始前]

教師：(常づね教卓近くに席を取っている男子学生に向かって)

ええと、先週の何か課題がありましたかね——宿題とか？

学生：出されました。

教師：あ、そう。やっぱり。(学生の答え方が気になって)……。あ、君ね、いま「出されました」と言ったよね。

学生：ええ。

教師：その「出されました」の言い方の文法なんだけれども、君の言った文の主語は何でした？

学生：(それは「もちろん」と言った口調で)「先生」ですよ。

教師：あ、そう。(自分に向かって語るように)受身ではないんだ。

学生：……？

この様な状況は時にして起こる可能性がある。我々が本稿で目指すところは、日常の日本語使用の状況の中で、この種の問題をどの様に意味づける

ことができるかを考えることである。可能の意味で“ら”抜きが形態が広まり、これが批判されるという状況があるが、我々にはこれにはかかわらない。歴史的にみて、平安時代から文献によく現れるようになったこの表現は、「自発」の意味が起源であったように言われている⁽²⁾。その事との関連についても特に論じるべき立場にはない。我々が考えているのは、日常の日本語における“れる・られる”を中心にして、談話におけるいわゆる敬語法の様態を考察し、談話分析の立場から、スタイル／ジャンル／レジスターの捉え方⁽³⁾を、可能な限り実践的に反省しようとするものである。

当然の事ながら、“れる・られる”の文法上の位置づけ、その文法的機能を考えないわけにはゆかない。また、スタイル／ジャンル／レジスターを視野に置く以上は、文法を越えた語用論的考察ならびに談話機能分析の方法にも及ばなければならないだろう。このような考察を「自発・可能・受身・敬讓」の全ての意味領域にわたって加える必要があるのだが、さしあたり、主として、「敬讓」の意味における使用の実態を念頭におくことにする。そして、その結果として、「敬讓」の“れる・られる”が、尊敬の気持ち以外の表現機能をもつことが明らかにできることを期待するものである。

I

“れる・られる”は、一般に助動詞として扱われる⁽⁴⁾。常識的に考えて、“れる・られる”が、名詞や形容詞のようなはっきりした意味内容を感じさせない要素であること、それだけで独立に用いられないことは、少し考えてみれば誰でもわかることである。また、古来、“て、に、を、は”として特別に扱われてきた要素⁽⁵⁾のなかでも、“倒れる、枯れる、洩れる”などの動詞と同じ形態の変化（屈折、ないし、いわゆる活用）を示すことも、日本語話者が知っていて、これが自然な言葉の運用の中で具現化するのである。このような事情は、“れる・られる”を、“させる、です、ない”などと同類のものとして扱うための大変分かりやすい根拠となるであろう。

しかし、“れる・られる”にどのような種類の語が先行し、あるいは先行しないのか、また、“れる・られる”のあとに、どのような種類の語が続くのか、あるいは続かないのか、を考えると同時に、“れる・られる”との結合における、これらの要素の機能を考察するならば、必ずしも、これらを、他の助動詞と同じように扱えないと考える立場をとる論者が出てきても不思議ではない。例えば、

A] 時枝誠記(1950)では、〈受身、可能、使役、敬譲の意を表はす「れる」「られる」「せる」「させる」は、助動詞としてよりも、接尾語として取扱ふべきものである〉(p.181)とし、これを〈話手の敬意の表現と考へるならば、事柄の表現に関することではなくて、話手の立場の表現として、これらの接尾語は、むしろ助動詞として辞に属するのではないかと云ふ疑問が起こるであらうが、…、話手の敬譲の意の直接的表現ではなくして、事柄について、それを特殊なありかたのものとして表現するところに…敬譲の表現が成立つのである。従って…、敬譲の意に基づく事柄の表現といふことが出来るのである。〉(p.120)かくて、“れる・られる”は、「～がる」「～がましい」「～させる」「～たがる」「～づく」「～めく」などと並べて〈用言的接尾語〉(p.158)に加えられ、〈叱られる、受けられる〉(p.159)の例が掲げられる。

B] 佐久間鼎(1951)では、〈複合的用言をつくりあげる場合の接続の三段階が、「連成」―「接合」―「熔接」の順序で、次第に緊密さを増していく…。〉(p.188)と云われ、〈「する」の受身の形で…、「される」となっているのは、熔接の程度がすすんだものと解される〉(id.)と考えられる。そして、さらに、〈一般に助動詞として取りあつかわれている「れる・られる」を、動詞に連結して形づくる一種の複合動詞(前述の熔接動詞)は、いちおう「うけみの形」ということにしましょう。〉(p.209 f.)と云うように、「れる・られる」は助動詞とは見なされず、複合動詞という連結形態の中に取り込まれる。その根

扱は、時枝（1950）とは違って、形態論的な考察によっている。（参照：佐久間鼎（1951），pp.186 ff.）

- C] S. E. Martin（1975）は「受身」「使役」などのカテゴリーは、動詞の語基（base）に接尾辞をつけて形成すると云い（p.288）⁽⁶⁾，受身形は接尾辞〈-（r）are-〉をとるが，語基が母音で終わるときは，〈-rare-〉，子音で終わるときは〈-are-〉であるという。例としては，「来る」の受身形「来られ-」を掲げている（id.）。敬語法については，受身形が敬讓表現の代用形となるという認識を示している（p.300）⁽⁷⁾。

かくて，敬讓の「れる・られる」に限定して論じる場合，敬語法とか敬讓表現の形態上の問題，つまり形態論・統語論的な問題と同時に，時枝（1950）に云う“敬讓の意の直接表現”と“敬讓の意に基づく事柄の表現”の違いについて考えておく必要があると思われる⁽⁸⁾。

II

“れる・られる”を助動詞と認めるかどうかにかかわらず，これらと結合した形態がどのような屈折を示すかについては既に言及した。ただ，“れる・られる”が自発・可能・受身・敬讓の意味を持つそれぞれの場合によって，命令形の有無に違いがあることは周知のことである。例えば，可能の意味の「来られる」や自発の意味の「思われる」に命令形があるとは考えにくい。また，敬讓の命令形「来られよ」はむしろ古語に属するであろう。受身にしても命令形は話言葉では稀ではないかと思われる。例えば，「抱かれよ」とは云わずに「抱かれなさい」と云うとすれば，命令形は“れる・られる”の屈折形であるとは云えない。

しかし，敬讓の“れる・られる”において，他の意味においてと同様に，次のように屈折が認められることは云うまでもない：

- (2)イ. 先生は来られない。(いわゆる, 未然形)
- ロ. 先生が来られた。(いわゆる, 連用形)
- ハ. 先生は来られる。(いわゆる, 終止形)
- ニ. 先生が来られる頃に, 伺います。(いわゆる, 連体形)
- ホ. 先生が来られればいいのですが。(いわゆる, 假定形)

敬讓の“れる・られる”が結びついた形式を“れる・られる”動詞句と呼ぶことにして, これ(～で示す)に接続する助動詞の形態を概観すれば,

- (3)イ. 未然形+ : ～ない, ～ぬ(打消), ～まい(打消推量); ～よう(推量)
- ロ. 連用形+ : ～た(過去); ～たい(希望); ～ます(丁寧); ～そう
うだ, ～そうです(様態)
- ハ. 終止形+ : ～らしい(推量); ～そうだ, ～そうです(伝聞)
- ニ. 連体形+ : ～だろう(推量); ～のだ, ～のです(指定); ～よ
うだ, ～ようです(比況)

のような結合が考えられる。例えば、「先生は来られそうです。」

しかしながら, 周知のように, このリストには, 互いに排他的なもの, 共起可能で互いに結合できるものがある。例えば, 「～まい」と「～のだ」は共起できないが, 「～たい」と「～のです」は, この順序で結合可能である。例えば, 「見たいのです。」

これと同じことを, 敬讓の“れる・られる”について考察しても, 同様のことが明らかになる。

“れる・られる”動詞句の場合, 動詞の語基と“れる・られる”の間にたつことのできる要素にどの様なものがあるかを検証してみると, そのような要素がきわめて限られていると云うことができる。その理由は, 一つには“れる・られる”が, いわゆる未然形の屈折をへた形態とのみ結び付く
のに対して, 未然形を有するのは, 「せる・させる」(使役→「せ, させ」)

および、「ます」（丁寧→「ませ」）のみである。しかも「ます」は語順において“れる・られる”に先行することができない。従って、唯一可能な結合形は、「(あそば)+せら+れる」となる⁽⁹⁾。しかも、これについても、“せられる”を一体として考え、敬讓の表現の一つに加えることも不可能ではない。他の結合については、語順を改めなければ容認可能な形にはならない。

語基	助動詞	[+～+れる・られる”]	語順修正
	せる	→あそば-せら-れる	>-せられる
	ない	→*	>-れ-ない
	ぬ	→*	>-れ-ぬ
	まい	→*	>-れ-まい
	よう	→*	>-れ-よう
あそ-ぶ	た	→*	>-れ-た
	たい	→*	>-れ-たい
	ます	→*	>-れ-ます
	そうだ/です	→*	>-れる-そうだ >-れる-そうです
	らしい	→*	>-れる-らしい
	だろう	→*	>-れる-だろう
	のだ/です	→*	>-れる-のだ
	ようだ/です	→*	>-れる-ようだ

このような形態素配列論的・統語論的事実の考察から、時枝（1950）、佐久間（1951）、Martin（1975）などが、“れる・られる”に他の助動詞とは異なる扱いを加えた（前節参照）理由の裏付けが、部分的にも得られたと思う。

しかし、同じ様な考察を続けてゆけば、敬讓の“れる・られる”ないし“れる・られる”動詞句に「ます」が加わって一層丁寧な表現が形成される

ように、丁寧さの程度を更に大きくする表現形式との選択的対立が明かになる。この対立は既に、「そうだ／そうです」「のだ／のです」「ようだ／ようです」の中に認められ、三尾砂(1995)が常体と敬体として区別したものの(参照:p.216)の対立そのものである。

三尾(1995)によれば、常体はくだ体(親友間または目下への文体)といわれるが、“れる・られる”そのものは、常体の形式であると云える。常体に対して、敬体は二種類があり、一つはくです体(日常普通の社交文体)で、他の一つくございます体(丁寧な敬体)と区別される。“れる・られる”が常体だとすれば、それに対立する形式は「れます・られます」が敬体の第一類でありが、さらにこれと対立する第二類の敬体を考えることは難しい。しかし、無理を承知で捻り出すとすれば、「れる・られるのでございます」をこれに当てることになるであろう。

以上、三尾(1995)の文体上の分類⁽¹⁰⁾にならって敬譲の“れる・られる”の位置づけを試みるならば、

- 常体 — (1)だ体……………～れる／られる
- 敬体 — { (2)です体……………～れます／られます
- (3)ございます体……～れるのでございます／
- られるのでございます

のようになる。

しかしながら、敬譲の諸表現は“れる・られる”ならびに、「ます、ございます」のような文法的形式のみを基にして成立するのでないことは周知のとおりである。すなわち、日本語を難しい言葉だと思わせる多くの敬譲語の存在と役割を考えなければならないのである。しかし、敬譲語とまでも云わなくても、語の意味の上から、敬譲表現が適切か不適切かを見極めることができるのが普通である。例えば、

- (4)イ. 先生が出て行かれた。
- ロ. *泥棒が出て行かれた。

を比べてみれば明らかなように、先生は敬意の対象になり得る社会的役割を担っている人であるが、泥棒は反社会的な行為を弾罪されるべき人間であるから、(4)イ. は適切な表現であり、(4)ロ. は不適切である。(この点については後に再び取り上げることになるであろう。)、ここでは、敬讓語のいくつかと“れる・られる”とを関係させて考察してみる。つまり、“れる・られる”動詞句と共起可能な語句と不可能な語句があるのである。前者は一般に敬讓語と云われる語類に属する。

再び三尾（1995）によって敬讓語の類別⁽¹¹⁾を示せば、

- (1) 尊敬語：「殿下」のような名詞、「召し上がる」のような動詞
- (2) 謙讓語：「愚息」のような名詞、「いただく」のような動詞
- (3) 丁寧語：「お辞儀」のような名詞、「亡くなる」のような動詞

の様な違いが認められる。これらはいずれも文法形態の違いではなく、語彙論上の差別である。しかしながら、周知のごとく、日本語においては、上掲の例文(4)イ./ロ. で示したような、語彙論上の選択と文法形態の呼応が明かに認められる。

- (5)イ. 殿下はこちらでお食事を召し上がります。
- ロ. *愚息たちはこちらでお食事を召し上がります。
- ハ. 愚息たちはこちらで食事をいただきますます。
- ニ. 子供らはこっちで食事をたべます。

ここで見るように、(5)ロ. の文は、謙讓語の「愚息たち」と尊敬語の「召し上がる」のミスマッチによって不適切な表現となる。それを修正したものが(5)ハ. である。(5)ニ. は、文体としては丁寧体であるが、特に敬讓の意が含まれているとは感じられない。

そこで、“れる・られる”とこれらの敬讓表現との関連を考えると、“れる・られる”動詞句が謙讓表現と呼応して用いられることは、本来的に

はないと考えるべきであろう。例えば：

- (6)イ. *愚息が立派な賞を戴かれた。[→戴いた。]
- ロ. *愚息がご挨拶に上がられます。[→上がります。]
- ハ. *愚息はそのように申されます。[→申します。]
- ニ. *愚息は欠席いたされます。[→いたします。]

これに対して、尊敬語的表現には“れる・られる”動詞句との間にくいちがいを生じない場合がある。例えば：

- (7)イ. 殿下は大変喜ばしくおぼしめされたご様子でした。
- ロ. この店には横綱がときどき見えられます。
- ハ. ご主人様はお風邪を召されて、寝ていらっしゃいます。
- ニ. 先生はそのようにお考えになりました。

これらの例文では、尊敬表現である「おぼしめした」「みえる」「召す」「お考えになる」に、さらに“れる・られる”が加えられて、一層丁寧な尊敬表現になったものである。

以上の形態素配列論・統語論的形式の考察の結果を要約するれば、

- イ. “れる・られる”には、他の助動詞と比べて、動詞語基と結合する接尾辞・接尾語的形態素と見なすべき特徴が強い。動詞語基と“れる・られる”の間に立ち得るのは、使役の助動詞「せる・させる」だけであり、“せられる・させられる”は独立に助動詞ないしは接尾辞・接尾語的形態素と考えることも可能である。我々は“れる・られる”動詞句を認めることにする。
- ロ. “れる・られる”は、意味上適切な一般の動詞の未然形のほかに、未然形を有する助動詞の後に接続するが、未然形をもたない助動詞のあとには接続できず、逆に、それらの助動詞が“れる・られ

る”の後に接続することになる。

- ハ. 敬讓の“れる・られる”動詞句それ自体は、それだけでは丁寧な表現のスタイルを形成せず、これに助動詞「～ます」を結び付けることによって丁寧体（敬体）となる。さらに「～のでございます」と結び付けることにより、一層、丁寧なスタイルとなる。
- ニ. 敬讓の“れる・られる”動詞句は、敬讓の意味にふさわしい語句と共起する。
- ホ. “れる・られる”動詞句が、謙讓語と共起するのは、本来は不自然である。しかし、尊敬語の類とは違和感なく共起することがある。

III

“れる・られる”動詞句ならびにこれと結び付いた様々な敬讓表現には、前節で考察したような制約があるが、これが実際の談話に現れてテキストないしテキストの部分を構成するという事実の考察を行う場合、形態素配列論・統語論の視点を離れて、個々の文も発話として場面の中に据え直す必要がある。

三尾(1995)は、話し言葉に標準語：方言の区別を認める他に、「きたない言葉」「ふつうの言葉」「ていねいな言葉」をく丁寧さの表現といふ角度から(p.5)見定めることから始めているが、話し手と聴き手の互いの地位、話題の人物・事物の位置を考慮して言葉遣いを決めることの問題として敬語法の前提においている(同書, p.13. 参照)。彼に従って例をあげれば、ある事を「止めてほしい」という気持ちを伝えるために用いられる言葉遣いとして：

(8)イ. よせ!

ロ. よしてくれ! / やめてくれ!

ハ. よしてください。 / やめてください。

ニ. やめていただけませんか?

ホ. やめていただきたいんですが。

へ. およしになっていただけませんか？

ト. およしになっていただけませんか？

チ. よしてくださるというわけにはまいりませんか？

リ. およしあそばせ。

など、短く率直な表現から、相手の気持ちを忖度して婉曲で長い言葉遣いをしている場合があり得る。概して、長い婉曲な言葉遣いはより丁寧で、相手の気持ちを尊重していることになる。そこに話し手と聴き手の互いの位置、つまり、人間関係、あるいは、話題の人物・事物の位置づけが反映するということになる⁽¹²⁾。

“れる・られる”動詞句についても、時枝(1941)は<端的な表現に比して婉曲であり、婉曲であるということが敬語的表現になる所以である。それは宛も「見よ」という第二人称者の行為に対する命令としての表現よりも、「みていただけませんか」という話手の希望としての表現の方が婉曲⁽¹³⁾であり、又敬語的であるのに等しい。>(p.464.)と述べている。

しかしながら、このような丁寧さのあり方は、日本語に限らない。そして、丁寧な表現が尊敬の気持ちを伝えるにふさわしいか否か；敬讓の意があると認める場合、実際に話し手・聴き手の間にある客観的關係が根拠になり得るのか否か、すこし立ち入って考える必要がある。(この点については、次節参照)

例えば、Geoffrey N. Leech (1983)は、敬語的(polite)な発話を言語行為理論的に行動原理(maxim)の枠組みの中で検討しながら、そこに不誠実(insincere)な言葉の飾り(garnish)に過ぎない場合のあることを考慮して、慎重に考察を深めている(cf. p.83.)⁽¹⁴⁾。日本語の敬語法において、例えば、「ごぞいます体」が、真実な尊敬の気持ちをもって用いられているのではない事が少なくないのは、日頃、経験する処である。英語の‘politeness’は丁寧さを意味し、‘polite’であるということは礼儀正しいことを意味するように受け取られることが多いが、英語自体での用法でも、(1)社会

的に適切で尊敬と配慮をもって行動することをいう場合 (=courteous), (2)社会的規範に合致しているだけで誠実であるとは限らない場合 (=civil), (3)上品で洗練されているという事をさしている場合 (=refined) が区別される⁽¹⁵⁾。日本語の敬語法は、これらのいずれの意味にも該当するであろう。三上 (1995) のいう〈きたない言葉〉も含めて、常体と二種類の敬体のそれぞれが敬讓の何等かの意味を話し手の意図したものそれ自体として表わしていると考えるのは難しい。むしろ、互いに対立する表現のスタイルのいずれを選択するかと云うこと、および、その選択が発話行為の場面において適切であるかどうかが問題であろう。

(9)イ. タバコ、かまわない?

a. Mind if I smoke?

ロ. すみません、タバコを喫んでも差し支えないでしょうか?

b. Excuse me, sir, would it be all right if I smoke?

においては、聴き手にとって不快であり不都合であるかもしれない話し手の喫煙について、社会的に適切な行動として、まず、聴き手の意向を問い質している訳であるが、(9)イ./a. が敬体でないことは明らかだとしても、これら自体が非礼な発話行為であるとは限らない。このようなスタイルを選択したことは、話し手と聴き手の対人関係がそれにふさわしいものであれば、十分に適切であり、親しい人間関係の中で(9)ロ./b. のスタイルを選択したならば、むしろ、それまでの人間関係にひびを入れる結果になるかも知れない⁽¹⁶⁾。ただし、ここでいう人間関係とは、現実の特定の人物の間の特定の関係を云うのではなく、あくまでも、対立するスタイルの選択に対応する、人間関係における親疎を抽象的にさしているにすぎない。

“れる・られる”動詞句における人間関係との関連に考察をすすめる前に、センテンスの形をとる発話における“れる・られる”の機能を確認しておくことにしたい。

云うまでもなく、ある発話は話し手が組み立てたセンテンスの形をとるのが普通であり、話し手の発話行為は聴き手に向けての意図的な行為である。聴き手に向かつての伝達意図 (communicative intention) が聴き手に受け入れられなければ、話し手の如何なる発話行為も目的を達することができない。つまり、伝達意図の聴き手による認知と受け入れがコミュニケーションの前提である⁽¹⁷⁾。

さて、話し手の伝達意図はただ一種類のものであるか？ つまり、伝達意図は単に伝達しようとする意図でしかないのであろうか？ 明かに、聴き手の注意を喚起するという限りにおいては、伝達意図はそれ以上のものではないが、伝達意図はあくまでも前提にすぎない。話し手は、聴き手が伝達意図を受け止めてくれるとわかった状況に於て、本来の伝達行為 (communication) を遂行することができるのである。

そこで、本来の伝達行為には、必ず話し手の伝達意図に結び付いた話し手主体の表現行為の要素が不可欠に存在する。ただ単にももの名前を挙げるだけでは、このような主体の表現行為は成り立たないが、しかし、

(10) おや！

とでも云っただけで、何かに気づいて聴き手の注意をそこに向けようとする主体的表現行為が実現している。その後、「驚いた」「君だったのか」などという発話が続くことによって、「おや」の意味は拡充されるが、それ無しでも、話し手の表現行為は、それ自体として成り立っている。さらに、

(11) イ. 雀が来た。

ロ. 雀かな？

のような発話になれば、話し手の主体的表現行為には一色ならぬものがあることは明かである。(11)イ. は、例えば、庭に雀が来て餌をついばんでいる事について報告をし、例えばその状況に嬉しがっている気持ちを表現

しているか、あるいは、雀の行動を妨げないという希望を表現しているか、というような、主体的な行為としての発話である。他方、(11)ロ.は、対象が雀か雀以外の小鳥かを確かめられない状況の中で、そのいずれかを知りたいという願望を、穏やかな形で表現している。いずれにしても、話し手自身の表現意図は多様であり得ることの証拠である。ただ、一つ確かなことは、それが聴き手や第三者に属するのではなく、あくまでも、話し手に帰せられるべき意図であるということである。発話のこのような要素を「主体的表現」とか「主観的表現」とかいうことが普通であるが、我々はこれをモードゥス (modus), 略して“M”と称することにする⁽¹⁸⁾。

しかし、同時に、(11)イ./ロ.の発話には、「雀が来る」「そこに来ているのは雀である」とでも言い替えられる内容が含まれている。話し手は、まさに、このような客観的な内容について、主体的な表現を行っているのであるが、これらの発話が、このような客観的な内容を表現していることは、動かし難い事実である。発話の中のこの種の要素は、「客観的表現」とか「客体的表現」というが、我々はこれをディクトゥム (dictum), 略して“D”と呼ぶことにする。

ここで“れる・られる”動詞句の位置づけに戻ることができる。つまり、“れる・られる”が話し手の敬意という主観の主体的表現であるか否かという問題である。本来、聴き手あるいは話題の人物・事物に対する敬意の心は話し手の主観に属するものである。これをもって主観の主体的表現であるとするならば、例えば、「感謝」「軽蔑」「思い出」「恋」などの語はすべて主観の表現になるであろう。しかし、

(12)イ. 彼は感謝こそすれ、軽蔑の気持ちなど微塵もありません。

ロ. 彼女は、しばし、その恋の思い出にふけていました。

のようなセンテンスで話し手の主観が現れているのは、主語の心理を表わす語においてではなく、話し手が聴き手に伝達しようとしている態度その

もの表現である。(12)イ./ロ.のいずれのセンテンスにおいても、話し手は聴き手に対して、また、発話の内容である事柄について、その主観を主体的に表現している部分は、(12)イ.においては「～ません」の部分、(12)ロ.においては「～ました」の部分であると言えよう。

「～ません」(この場合、「ありません」全体)は「～ない」に対立して、打消しの判断と同時に聴き手に対する敬意とでも云うべき態度を表現している。「～ない」には、この後者、つまり敬意の主観的態度が含まれていないと考えられる。一方、「～ました」においては、話し手は発話の全体を話している現在の時点から切り離すという主体的表現行為を行うと同時に、聴き手に対する敬意の表現を行っていると言えよう。これは、「～た」との対比に於て明かに認めることができる。

これらの主観的主体的表現の要素、モードゥス (M) は、発話の客観的客体的要素、ディクトゥム (D) から、このように切り離して認知できるであろう。一般に「です」「ます」は、ただ単に、丁寧な文体であると云うだけでなく、話し手の聴き手に対する主体的態度の直接の表現であると考えられている。「でございます」「いらっしゃいます」となれば、聴き手になりたいする、より強い敬意の直接的表現であると云われる。これに対して、“れる・られる”は、必ずしも同じような話し手の直接的な敬意の表現とは認められていない。形態素配列論・統語論的に接尾辞と見なされる [時枝 (1950), 佐久間 (1951), Martin (1975) 参照] ためばかりでなく、それと関連しながら、同時に“れる・られる”をディクトゥム (D) の要素と見なすことが可能だからである。

前掲の例文を再び取り上げるならば、

(13)イ. 先生が出て行かれた。

ロ. *泥棒が出て行かれた。

において、《先生が出て行く》ことと、《泥棒が出て行く》ことは、客観的事実として、すなわち、ある人がいままで居た場所から外へ向かって移動

した、という事柄に関しては全く同類の出来事である。そして、「た」に表現される話し手の時のモードゥス (M) の直接的表現も同じである。ただ、(13)イ./ロ. のディクトゥム (D) には、既に、客体化された敬意が含まれていると考えられる。つまり、「先生」は、ある人にとって教え導いてくれる立場にある特別な人物であり、従って、そこに既に敬意の含意が認められる。それは、「～られる」として捉えられる出来事に適合性を持っている。それは、

(14)教師が出て行かれた。

という表現に感じられるかすかな違和感に見いだされる不適合性を含まないのである。つまり、「先生」は既にして敬語的表現であり、このような敬語は日本語の語彙の体系の中に客観的な客体的表現の手段として位置づけを与えられているのである。

“れる・られる”についても同じことが云える。つまり“れる・られる”動詞句は、ディクトゥム (D) の要素となるべき位置を占めているのである。それ故にこそ、既に考察したように、同じく客観化された客体的敬語表現である「おぼしめす (=思う)」「みえる (=来る)」「風邪を召す (=ひく)」「お考えになる (=考える)」と共起して、更に強い敬意の客体的表現を形作ることができるのである。

以上、本節で考察したのは、“れる・られる”に認められる敬意の表現については、

- イ. より強い敬意の表現が、婉曲な形式、比喩的迂言的形式から発する；
- ロ. 敬語的の効果ないし力は、語・形式に内在するというよりも、非敬語的表現との選択的対立によって得られる；
- ハ. 敬語表現には、直接的な主観的・主体的なモードゥス (M) に属するものと、客観的・客体的な要素としてディクトゥム (D) に

属するものがある；

二. “れる・られる” 動詞句は客体化された敬意の表現である。

IV

以上の考察を、序言に掲げた実例やその他の具体的なテキストについて、場面の特徴と関連させながら、そこに生起する“れる・られる”動詞句の表現効果を考察してみたい。

まず、本稿冒頭の実例の一部を再録すると、

(15) 出されました。

これを完全なセンテンスに復元してみると、

(15') 先生は宿題を出されました。

となる。ここで、「出され」は「先生」と呼応して、客観的な尊敬すべきものとして把握される行為を表わす。学生は「ました」によって教師への敬意を直接に表現しているが、それは「出しましたよ」と言い替えれば、敬意の客観的表現とはならないが、「よ」における主体的な態度の直接的な表現が加わることによって、親近感を伝えることができたであろう。しかし「出されました」には、親近感ではなくて、社会的に規定された上下の対人関係が客観的に表現されていて、むしろ、距離感が生まれている。

つぎに、

(16) [天皇主催秋の園遊会 (1997.10.30.) : 『週刊新潮』 43, pp.159 f.]

イ. [天皇が宇宙飛行士若田光一氏に質問] : いつ頃また飛ばれるわけですか？

ロ. [天皇が漫画家加藤芳郎氏に語りかける] : いつもよい漫画を書

かれて [ママ] ……

をみると、“れる・られる”動詞句が、聴き手に対して、身分の上で尊敬の気持ちを抱くという立場にないと思われる話し手によって用いられていることに注目しなければならない。「飛ぶ」「描く」の主語は聴き手であるが、天皇は聴き手を「あなた」とか「若田さん／加藤さん」と呼ぶことができるか疑問である。従って、主語を表わさない形式として、第二人称指示の気持ちを“れる・られる”動詞句に託して表現されたと思われる。そこに、丁重ではあるが若干の距離感が生まれている。

同様なことは、より公式の場における皇族の発言の中に認められる。例えば、

(17)イ. [身体障害者スポーツ祭典の開会式（広島）における皇太子の挨拶（1996.10.26.）：テレビ報道番組（日時の記録なし）]

地元の人々との交流を深められ……

ロ. [冬季オリンピック選手団結団式における秋篠宮の挨拶（1998.1.25）：テレビ報道番組（日時の記録なし）]

友好を深めることに努められるよう希望します。

この種の挨拶は、皇族の仕事として定例化しており、その表現内容と形式もパターンがある⁽¹⁹⁾。平成10年度全国高等学校総合体育大会四国98総体開会式（1998.8.1.）における皇太子の挨拶は、4つのセンテンスから成り立っているが、開催を祝賀し、参加者を励ますという内容である。そのうち第2、第3の2つのセンテンスを引用（NHK総合テレビより）すると、

(18) 2. 選手の皆さんが、日頃鍛えた力と技を充分に発揮されると共に、この大会が大勢の地元の高校生の協力によって実り多いものとなるよう期待いたします。

3. それと共に皆さんが、「輝こういまこの時を、君達と」のスロー

ガンのもとに、互いに友情を育み、地元の方々との交流を深め、高校生活のすばらしい思い出をつくられるよう願っております。

この挨拶では、聴き手の中の参加選手の高校生に向かって「皆さん」と呼びかけているために、“れる・られる”動詞句が敬語法に属するのか、可能の意味なのか、曖昧になっている。「発揮なさるよう」/「おつくりになるよう」と置き換えられるのか、「発揮できるよう」/「つくることができるよう」と置き換えられるのか、いずれでもよさそうに思われる。しかし、以下に掲げる(21)イ.～ニ.や(22)3./4.の用例を参照すれば、敬讓の“れる・られる”であるとみなすのが自然であると思われる。

しかし、

(19)[皇后の赤十字総裁としての挨拶(日時の記録なし):テレビ報道番組より(日時の記録なし)]

限りない努力を続けられておいでの皆様にお会いできることを……

という用例をみると、余りにも丁重すぎるのではないかとさえ思われる敬語法である。「続けておられる皆様」か「続けておいでの皆様」で充分であろうかと思われる。あるいは、ここに皇后の人柄が現れているのか、あるいは、赤十字総裁と会員の関係のしからしめるものなのか、しかとはわからない。

皇族の立場は最高度に公的なものである。皇太子と同じく平成10年度全国高等学校総合体育大会四国98総体開会式における文部大臣と香川県知事の挨拶には同じ様な公的な“れる・られる”動詞句が現れる。

(21)イ. 晴れて本大会に出場された選手の皆さん、…(文部大臣)

ロ. すばらしい感動と思い出のある大会とされるよう期待しております。(文部大臣)

- ハ. 来県されました選手、役員の皆さんを、…（香川県知事）
ニ. はつらつとした競技を展開されますと共に、…（香川県知事）

これらの挨拶における“れる・られる”動詞句は、親しく呼びかける口調と共に現れており、必ずしも大きな距離感を感じさせないものであるが、しかし、客観的な身分の関係から云えば、高い立場から下に向かって話しかけているのであり、話し手の公的な立場を含意しているというニュアンスがある。

この事は、平成10年8月6日の広島平和大会における総理大臣（小淵恵三）の挨拶にも認められる。この挨拶は本文13のセンテンスから成り立っているが、その中で2回“れる・られる”動詞句が現れる。

- (22) 3. 原爆の後遺症に苦しんでおられる方々に対して、心からお見舞いを申し上げます。
4. 廃虚の中から立ち上がり、今日、百万人の人口を擁するこの広島市を見事に築かれました、市民の皆様の……

高度に抽象的な政治的辞句の中で、これら二つの用例をみると、(22) 4. は客観的に尊敬に値することとしての認識を示しているものであろうが、(22) 3. が尊敬すべき事柄でないことは明らかであり、いずれも、話し手の高度に公的な立場の反映を認めない訳にはいかない。

これらの用例では、談話の「言語活動領域」(field)、「役割関係」(tenor)、「伝達形式」(mode)の観点から、レジスターの上での一体性をみとめることが容易であり、それを公式な場での挨拶というジャンルと結び付けることも可能であろう。これらのテキストには、ジャンル構造選択可能性 (generic structure potential)⁽²⁰⁾の同一性を認めることもできるのである。

しかし、同じ様な公式の場での公的な立場からの挨拶の中でも、“れる・られる”動詞句を用いない場合がある。前掲の平成10年度全国高等学校体

育四国 98 総体開会式での他の三つの挨拶では、この敬語法が全く現れていない。とくに、丸亀市長の挨拶は、「皇太子様、雅子様、ようこそ讃岐の地、丸亀へお越し下さいました。」に始まる、気どりのない率直なものであった⁽²¹⁾。

また、第 80 回全国高等学校野球選手大会開会式における挨拶の中でも、大会会長（朝日新聞社長）は“れる・られる”動詞句を用いなかった。その分だけ、雰囲気や和らげるような効用があったと感じられた。

このようにして、公的な場⁽²²⁾における挨拶というジャンルを設定することには問題がないとしても、また、そこにレジスターの統一性が認められるとしても、それが、“れる・られる”動詞句の選択という形で具現化するとは限らない。同じジャンルにおいても、他の選択の余地があるのである。従って、これらの“れる・られる”の生起は、むしろ、スタイルの違いとして認めることが穏当であると思われる。

さらに、付言すれば、文部大臣は 3 回、日本学生野球協会会長は 1 回、日本高等学校野球連盟会長は 2 回“れる・られる”を用いた。それらは、大会参加者である聴き手を主語とするセンテンスに生起している。例外は一例のみであった。それを掲げると：

(23) 先ほど松下会長が云われましたように、……

—— 日本学生野球協会会長

これは、聴き手に対する敬意ではなくて、第三者、あるいは、出来事に対する敬意の表現として理解できる。

つぎの 2 例は、聴き手を主語とするセンテンスにおける“れる・られる”動詞句の使用である。

(24) [NHK 総合テレビ：「新大臣に聞く —— 太田総務庁長官へのインタビュー」(1998.8.4.)]

今度の内閣は官僚主導から政治主導へということが大きな問題にな

と思うんですけども、どういう決意で一連の改革に取り組んでい
かれますか？
——森田アナウンサー

(25) [成田空港、ハワイから帰国したタレントを追いかける芸能レポ
ーター（女性）；実況画面の雑音の中から聞こえる声]
離婚届はもう出されたんですか？ [——レポーター氏名不詳]

(24)では、聴き手を含めた出来事に対する敬意が表現されているのに対し
て、(25)になると、聴き手に対する敬意もなく、話題も尊敬に値する出来
事とは考えにくい。それなのに何故“れる・られる”動詞句がとっさに使
われるのであろうか？ 思うに、そこには、公的社会的機関であるテレビ
報道に携わる立場を意識し、公的な立場から私人に情報を要求するという
姿勢が現れているように感じられる。(25)には奇異な感じを与える可能性
があるが、それは、客観的事柄の性質によるのであり、(24)に奇異な感じ
が伴わないのも、また、客観的事柄の性質によるのであろう。いずれにし
ても、(24)と(25)に共通するのは、テレビという公共性の高い伝達の媒体
(channel) との関係が深いと考えられる。

(26) [芸能番組終了時のアナウンスメント —— HBC (1996.6.8.)]

「世界不思議発見」は 499 回になりますが、この 10 年間、2,000 問の
質問が寄せられました。その質問を寄せられた方々には……

——草野アナウンサー

このテキストでも、視聴者に呼びかけている訳ではないのであるが、公的
機関としてのテレビという媒体の彼方に位置しているということから、“れ
る・られる”が使われ、視聴者との一定の距離をとることが、潜在的に意
図されているのではないだろうか。

そして、最後に、路線バスの案内アナウンスの例を挙げて、同種の含意
を比較によって示したい。

(27)イ. 次は「忠霊塔前」でございます。お降りの方はお知らせ下さい。月寒幼稚園へおいでのかたはこちらで降りられると便利です。(北海道中央バス札幌市西岡月寒線)

ロ. 次は「6条平和通り」でございます。お降りの方はお知らせ下さい。森産婦人科病院へおいでの方はこちらが便利です。「6条平和通り」です。(旭川電気軌道会社バス旭川市内)

(27)ロ.の方が率直であり、むしろ親切で身近に感じられるのに対して、“れる・られる”動詞句を用いた(27)イ.には、敬意の必要のない私人である乗客の用件に対して、会社としての公的な立場をことさらに見せつけているように感じられる。この種のアナウンスメントには、文書作成に携わる実務家と営業関係者との協議で諮られた結果として出来上がったテキストであるという特徴がある⁽²³⁾。そこに、テキストの作成過程の底流に潜在する意識のあり方が浮かび上がってくるという可能性が考えられる。

以上のテキストにおける“れる・られる”動詞句の生起の仕方を考察したが、以下の事を実証できたと考える：

- イ. これが、モードゥス (M) の要素とすべき対人関係において、話し手の聴き手に対する敬意の直接的な表現であると考え難い；
- ロ. “れる・られる”は、ディクトゥム (D) に属し、語彙・文法的 (lexico-grammatical) レベルの事象と考えるべきである；
- ハ. “れる・られる”の生起の仕方は、談話における場面の脈絡と照らし合わせるならば、「言語活動領域」(field)、「役割関係」(tenor)、「伝達様式」(mode)との深い関わりを感じさせる。しかし、これを特定のレジスターとかジャンルに属するものとして定着位させることは、この段階ではできない。

結 語

本稿では、“れる・られる”の語彙論的・文法的特性と、収集した用例の考察により、これが、単純に謙讓の助動詞であると考える事に賛同しない立場を明らかにした。形態素配列論・統語論的形態の考察においては、事実そのものに疑問の余地はないが、日本語の談話のレベルに至るシステムの中での位置づけに考察を加えてみるならば、その観点からも同じ結論に達することになる。

本稿の考察から、概ね次のようなことを考えることができないであろうか：

- イ.“れる・られる”がある種のスタイルの現れであることは間違いない。「汚い言葉遣い」、「普通の言葉遣い」、「謙讓の言葉遣い」とは異なるが、真正の「尊敬の言葉遣い」であるとは言えない。
- ロ.最後の節で考察した資料は、公共性の高い場面・状況の特徴を示していることから、“れる・られる”の語彙論的・文法的機能にも、単なる敬語法では説明できない要素が生まる変化の過程にあるという可能性がある。

この段階で想定されるのは、“れる・られる”の謙讓以外の用法、とりわけ、受身の用法における語彙論的・文法的機能ならびに談話機能にも、同様の考察が適用できるかも知れない。本稿は、いわゆる「敬讓」の“れる・られる”に対象を限定することで、受身の用法を含めた課題の存在を示唆することができたと考えるものである。

(完)

註

- *特に、日本語の語法・文体は、筆者本来の研究領域外の課題である。従って、国語学・日本語学を専門とする諸家の指導助言を仰ぐべきところであったが、時間的な余裕が得られなかったために、その願いをはたすことができなかった。

た。大方のご叱正をお願いする次第である。

- (1) 筆者の資料：北海道大学教養部における英語の授業前。年月日の記録なし。しかし、1990年前後である。

同様の曖昧さは日常的に遭遇できるものである。小説家津村節子の随筆「合わせ鏡」(『朝日新聞』日曜家庭欄連載)からの抜粋：

“以前、木山捷平さんの随筆で、宿帳に職業を何と書いてよいか迷い、文筆業と書いたところ、筆を扱う業者と思われ、筆をみせてください、と言われてた、と瓢々とした文章で書かれていた。……” (1998.9.6.)

の下線部は〈書いていらっしやった〉と同義なのか、〈書いてあった〉と同義なのか、曖昧であると思う。

- (2) 金田一春彦他(1995), p.298. / 橋本進吉(1969), p.284 f. / 時枝誠記(1941), p.462. / 大野 晋(1987), p.298, など参照。釘貫 亨(1991)ならびに辛島美絵(1993)の論考も参照。後者の論考では、敬讓の用法は、自発の意味からではなく、主に、話者を主語とする受身表現から転化・発達したという見解を明らかにしている。

- (3) 岡野 哲(1998)。

- (4) 例えば、湯沢幸吉郎(1953), pp.205 ff. など。

- (5) 時枝誠記(1952), pp.173 f. / 橋本進吉(1969), pp.266 ff. 参照。

- (6) Cf. “Passive verbs are made with the suffix *-(r)are-*; the suffix takes the shape *-rare-* after vowel bases and the shape *-are-* after consonant bases; ……”

- (7) Cf. “…, the passive of the causative — as any passivizable verb — can be used as an alternative form of subject exaltation.”

久野 暲(1983)では、“尊敬のモルフェーム”の附加として「始メラレル」の形を特徴づける(p.32, n.7)。Inoue, Kazuko(1969)も同様に受身の“れる・られる”について、“The morpheme *rare* corresponds to the passive in English”という(p.54.)。Howard, Irwin & Agnes M. Niyekawa-Howard(1976)は、“the passive morpheme *-rare-*”(p.203)というが、樹状ダイアグラムの中では、V(動詞)の位置づけを与えられている。Harada, S.I.(1983)は“れる・られる”を全く扱っていない。Prideaux, Cary D.(1970)は、接尾辞として“…adds to the verb the suffix *rare*,…”(p.55)ともいう。

- (8) 時枝誠記(1941), p.178 f. 及び p.464 f. 参照。“敬讓の意に基づく事柄”ということについては、“ありかたの認識であり、それは概念の移行において

はじめて成立する” (p.465) と述べられている。[下線部圏点]

- (9) 大野 晋 (1987), p.290 f.
- (10) 三尾 砂 (1995), p.216. 時枝誠記 (1955), p.180 では、ここでいう敬体の「ます」「です」「ございます」などは敬讓の助動詞として認められている。金田一春彦他 (1995), pp.626~631. 参照。
- (11) 三尾 砂 (1995), pp.364 ff. なお、虫明吉治郎 (1983) 参照。
- (12) 英語の類例を掲げると、

Stop!

You mustn't come in.

You shouldn't really come in.

I don't think you should come in.

On no account must you come in.

I think you're under an obligation not to come in.

— Blundell, John, et al. (1982), p.127.

などが考えられる。後の方になる程、堅苦しく丁寧になる。

- (13) Halliday, M. A. K. (1994²), p.354 ff. は INTERPERSONAL METAPHORS という標題で、一般の文法では取り上げない談話における対人関係の側面を取り込んでいるが、敬語法とは相当に違うけれども、そこでいう explicit/implicit や subjective/objective のカテゴリーは、参考にすべき点があるように思われる。今後の課題としたい。参照：畠 弘己 (1983)。
- (14) Cf. “This discussion has perhaps indicated some dangers in the use of the term ‘politeness’. There is an unfortunate association of the term with superficially ‘nice’, but ultimately insincere, forms of human behaviour, and it is therefore tempting to write off politeness (……) as being a trivial and dispensable factor which is no more than ‘garnish’ in the serious use of language.”
- (15) Sinclair, John, et al. (eds.)(1987), p.1109: s.v. *polite*.
- (16) McCarthy, M. & R. Carter(1994), p.63 に掲げられた例を参照：

(2.7) [in a fish and chips shop]

CUSTOMER: I'm interested in looking at a piece of cod, please.

SERVER: Yes, madam, would you like to come in and sit down.

(2.8) [in a new car salesroom]

CUSTOMER: A Ford Escort 1.6L, please, blue.

SERVER: Right, £10,760, please.

この例が示唆するところは、同じ売買（商取り引き）の場面でも、どんな商品を買うか／売るかによってテキストが違ふという点にある。日本語に差し替えて考えれば、市場で夕食のために魚を買おうとする主婦が「何かサンマなどどうかと考へているところなのですが。」などとは云わないであろうし、新車を買いたいと思っている場合、「ちょっとそこのベンツを一台ちょうだいな。」などとは云わないという事である。

類似のことは、敬語法の使い方とも関係があるのでここに引用した。

- (17) Sperber, D. & D. Wilson (1986), pp.60 ff. 参照。また、サクマ カナエ (1954) はく受取る側における受入れ態勢が適切に用意されなければなりません。> (p.2.) と云っている。
- (18) 芳賀 綏 (1954)／芳賀 綏 (1962), pp.44 ff.／三上 章 (1953), p.20.／小林英夫 (1959), p.202.／Bally, Charles (1950³), p.36.
なお、北原保雄 (1991), p.15 f. を参照。
- (19) 田中章夫 (1998) には、皇太子の誕生を報道する記事における敬語表現の変化を、昭和天皇の誕生（『都新聞』明治34年5月1日）、現在の天皇の誕生（『東京日日新聞』昭和8年12月23日）、現在の皇太子の誕生（『毎日新聞』昭和35年2月24日）について比較している。文章における仰々しさは和らいでいるが、必ず“れる・られる”動詞句が使われている。例えば、「ご健勝に涉せらるる趣」「御對顔遊ばされ」「顔をほころばせられた」の如くである。
- (20) このパラグラフの訳語は、ハリデー、M.A.K./R.ハッサン [筧 壽雄訳] (1991), p.38 f. 及び p.102 f. による。
- (21) テキストを録音筆写によって掲げる。全体は11センテンスから成る：
1. 皇太子様、雅子様、ようこそ讃岐の地、丸亀へお越し下さいました。
 2. 全国からの選手団の皆さんもすばらしい若さと元気をこの地に持ってきて下さいました。
 3. 心から歓迎申し上げます、厚く御礼を申し上げます。
 4. 有難うございました。
 5. 丸亀市も、丸亀の丸というのは、まあいい、円満、調和、平和にもつながると思いますし、亀は、ご存じ、大変縁起のいい、動物でありまして、長寿を表し、命の力を象徴していると思います。
 6. 皆さん方の若さに負けないような、ハーモニーとバイタリティの丸亀を造りたいと、いま考へた次第でございます。
 7. 丸亀のシンボルは400年の歴史の丸亀城、そして伝統工芸の丸亀うちわでございます。

8. こういったものも、市民の誇りでありまして、みんな一緒になって、この辺の言葉で云う、“まんでがんで” 皆さんを応援したいと思います。
 9. どうか皆さんもすばらしい出会い、ふれ合いのもとに、高校生としていっぱい、スポーツの分野で、この大会を盛り上げていただきたいと、激励を申し上げます。
 10. 心から皆さんを歓迎申し上げ、お礼のご挨拶にいたします。
 11. 有難うございました。
- (22) 畠 弘己 (1983) では、〈拘束場面〉 (p.63) という概念が導入されている。
- (23) 『北海道新聞』1996年9月30日の夕刊記事によれば、〈北海道中央バスでは、……。停留所の案内は三段階。まず停留所名、次に目印となる建物、最後に停留所付近のスポンサーの紹介をする。「次は△丁目、〇〇病院入口、パンの専門店△△をご利用の方もここでお降り下さい」と云った具合。スポンサーは代理店を通じて契約、一年ごとに更新する。
- 同バス事業部は「近年過剰放送に対する批判もあり、アナウンスは短めに、音量も低めに抑えています。」路線バスは主婦やお年寄りの利用者が多いため、路線近隣の商店などの紹介は「サービスとして続けたい」としている。〉

参 考 文 献

- Bally, Charles (1950³): *Linguistique générale et linguistique française*. A. Francke S.A., Berne.
- Blundell, John, et al. (1982): *Function in English*. Oxford.
- 芳賀 綏 (1954): ‘“陳述” とは何もの?’ 京都大学国文学研究会編『国語国文』第23巻第4号. pp.47~61.
- 芳賀 綏 (1962): 『日本語教室』東京堂.
- Halliday, M.A.K. (1994²): *An Introduction to Functional Grammar*. Edward Arnold.
- ハリデー, M.A.K./R. ハッサン [寛 壽雄訳] (1991): 『機能文法のすすめ』大修館書店.
- Harada, S.I. (1983): Honorifics. Shibatani, M. (ed.): *Syntax and Semantics 5*. Academic Press. pp.499~561.
- 橋本進吉 (1969): 『助詞・助動詞の研究』岩波書店.
- 畠 弘己 (1983): ‘場面とことば’ 『国語学』133. pp.55~68.
- Howard, Irwin & Agnes M. Niyekawa-Howard (1976): Passivization.

- Shibatani, M. (ed.): *Syntax and Semantics 5*. Academic Press.
- Inoue, Kazuko (1969): *A Study of Japanese Syntax*. Mouton.
- 辛島美絵(1993): ‘「る・らる」の尊敬用法の発生と展開」『国語学』172. pp.1~14.
- 金田一春彦他(1995): 『日本語百科大事典』大修館書店.
- 北原保雄(1991): ‘表現主体の主観と動作主体の主観」『国語学』165. pp.15~25.
- 小林英夫(1959): 『言語学の基礎概念 増訂新版』大村書店.
- 釘貫 亨(1991): ‘助動詞「る・らる」「す・さす」成立の歴史的条件について」『国語学』164. pp.15~28.
- 久野 暲(1983): 『新日本文法研究』大修館書店.
- Leech, Geoffrey N. (1983): *Principles of Pragmatics*. Longman.
- 三尾 砂(1995): 『話言葉の文法(言葉遺篇)』くろしお出版. [三尾 砂(1942) 帝国教育会出版部. の復刻]
- Martin, S.M. (1975): *A Reference Grammar of Japanese*. Yale University Press.
- McCarthy, M. & R. Carter (1994): *Language as Discourse—Perspectives for Language Teaching*. Longman.
- 三上 章(1953): 『現代語法序説』刀江書院.
- 虫明吉治郎(1983): ‘動詞の、語性と敬語体系」『国語学』135. pp.37~51.
- 岡野 哲(1998): ‘レジスター管見—談話分析の視点から—」『北海北海学園大学人文論集』No.10. pp.17~38.
- 大野 晋(1987): 『日本語以前』岩波新書. 1987.
- Prideaux, Cary D. (1970): *The Syntax of Japanese Honorifics*. Mouton.
- 佐久間鼎(1952): 『現代日本語の表現と語法』厚生閣.
- サクマ カナエ(1954): ‘発言の場・話題の場・課題の場」京都大学国文学研究会編『国語国文』第23巻第11号. pp.1~12.
- Sinclair, John, et al. (eds.) (1987): *Collins COBUILD English Language Dictionary*. Collins.
- Sperber, D. & D. Wilson (1986): *Relevance*. Basil Blackwell.
- 田中章夫(1998): ‘敬語表現の変化」『日本語学』Vol.17., No.5., pp.47~55.
- 時枝誠記(1941): 『国語学原論』岩波書店.
- 時枝誠記(1952): 『国語学史』岩波書店.
- 時枝誠記(1950): 『日本文法 口語篇』岩波全書114.
- 時枝誠記(1955): 『国語学原論 続篇』岩波書店.
- 湯沢幸吉郎(1953): 『口語法詳説』明治書院.